

持続的な森林保全に向けて <その3>

「森林保全」と「生計向上」の両立を目指して

本稿では、国際耕種が共同実施しているエチオピアの森林管理支援案件の前身にあたる「ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ 2」に、筆者が長期専門家(2006-2009)として従事した際の経験を基に掲題のテーマについて考えてみたい。このプロジェクトではワブブと呼ばれる森林管理組合を集落毎に組織し、森林境界や管理ルールを含む「森林管理契約」を交わすことで、森林管理の枠組みを作ることを目的とした。ベレテ・ゲラ地域の場合、「住民の識字率の低さ」や「グループ活動の経験がない」、「農地拡大等による森林減少が急激に進んでいる」といった課題があった。そこでまず契約締結によって過度な森林利用への社会的バリアをかけた上で、時間をかけて計画策定に必要な能力強化を図ることが適切と判断した(下図参照)。

すでにフェーズ1においてパイロット集落でワブブが組織されていたことから、フェーズ 2 では、ワブブをベレテ・ゲラ森林地域内に存在する全 124 集落に拡大し、「森林保全」と「生計向上」を両立する仕組みを展開することが求められた。生計向上活動は、森林保全に参加してもらうためのインセンティブに限らず、新たな収入源を得ることで森林利用の負荷を減らしていくことが期待される。また、ワブブによる森林管理能力の強化につなげるためには、グループによる様々な経験を積み重ねられる方策が望ましいとされた。

そこで、全集落に対して提供できる生計向上策として、国連食糧農業機関(FAO)が開発したファーマーフィールドスクール(FFS)の手法を導入し、農業技術の向上と、グループ活動の強化を図った。農業普及員が週1回のセッションを1年間にわたって実施し、園芸作物や苗木の栽培手法を実践した。翌年は、養成された農民ファシリテーターが、他のグループに対して FFS セッションを行った。この農民ファシリテーターの多くは読み書きができる若者や女性で、FFS を通じて集落内での自信と信頼を得ることにより、ワブブによる森林保全活動でもリーダー(集落長等)を支援するなど、積極

的に関わる姿が見られた。

また、ベレテ・ゲラ森林地域の大半にはコーヒーノキが自生して、伝統的な森林コーヒー収穫によって現金収入を得ている住民が多い。この点に着目し、「環境に配慮した森林からのコーヒー」として付加価値を付け、森林保全の両立を図る方策が提案された。これは NGO 団体「レインフォレスト・アライアンス」による認証を得ることで、従来よりも高い価格で販売することが可能となった。

一方、これらの活動をベレテ・ゲラ地域全域に展開するにあたり、カウンターパート機関であるオロミア森林公社による所掌を超えており、プロジェクト自体が主導して走り廻らざるを得ない状況であった。2012年のプロジェクト終了までに全 124 のワブブが設立されたものの、「森林管理契約」に基づく、「森林モニタリング」や「管理計画の策定」の体制の確立については不十分なまま、エチオピア側に引き継ぐこととなった。本プロジェクトの終了後、森林コーヒーに絞った後継プロジェクトが実施中である。加えて、2017年からは森林減少が進んでいる高地エリアを対象とした活動が加えられ、国際耕種が携わっている。



FFS セッションにおいてメイズ改良品種と在来種を比較・観察

ワブブ代表と普及員の合同による森林境界エリアのモニタリング

約 8 年振りに現地状況を見てみると、オロミア森林公社によるワブブへの支援は、ほとんど行われていない。行政の関与がなければ、モニタリングやルール順守の意識も薄れていく。しかし、プロジェクトを継続している森林コーヒーエリアでは、共同組合の内部監査によるモニタリングが行われており、森林管理に資する組織力の強化につながっている。森林事業の成果発現には時間がかかると言われるが、その要因は個々の能力・意識に加え、組織力の強化が一朝一夕ではできないことが考えられる。これは森林保全活動のみによって育成されるものではなく、コミュニティの協働による様々な経験の積み重ねであり、こうした機会を継続して提供できるような資金・支援が鍵になるものと感じている。



図. 森林管理組合(ワブブ)の設立と実施の流れ